
人魚姫

如月 雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人魚姫

【Nコード】

N9932E

【作者名】

如月 雪

【あらすじ】

病魔に侵された少女と、親友の死から立ち直れない青年の悲しい恋の物語親友の死に責任を感じ自分の生きる意味さえも解らなくなり、無意味な時間を過ごしていた青年に生きる意味を目覚めさせた少女は、事も有るうに親友の妹だった

出逢い（前書き）

拙い文章ですが、最後まで読んで頂けたら幸いです

出逢い

僕達が出逢ったのは運命と言う名の
神の仕業だったのかも知れな
い

五年前の夏

僕は親友に誘われた海岸で、
溺れていた少女を助けた

血の気の無い顔を見たとき 思わず見よう見まねで人工呼吸をしていた

その子が息を吹き返した時 遠くからその子を探しているらしい数人の大人の声が聞こえてきた

「るっ！るっ！」

駆け寄って来た父親らしき人達にその子を任せ、僕は彼らの元を離れ 親友の待つ海の家に戻っていった

「海！お前びしょ濡れじゃないか！何してたんだよ？」

悪友の古澤晃がバスタオルで海の頭を拭いてくれた

少しお節介だが気の良い奴だ

「何処へ行つてたんだよ？　せつかく女の子に声を掛けたのにさ、お前が居なくちゃ始まらないってんだよ。それなのに、知らない間にお前が居なくなるんだからな」

「そつだよ。翔と海が居ないと女の子が寄ってきてくれないんだもんな」

がりがり君を食べながらぼやいているのは、内　弘樹だ。

僕は濡れたＴシャツを着替えながら　隣に座っている小野寺翔おのでらしやうを見た

ニヤニヤと笑っているあの顔は　何か企んでいる顔だ

タオルの隙間から覗いた僕の視線と翔のそれがぶつかった。

「何だよ？」

ニヤリと口を歪めて笑う翔はクツクツと喉の奥で笑った

こんな時はろくな事が無い

こいつと付き合いだして学んだ一つだ。「何 企んでる？」
ドスツと翔の横に座ると 声を低くして聞いた

「お前に女の子を紹介してやろうと思つてさ。すっげー可愛いぞ〜
近くまで来てるらしいからこれから二人で行かないか？」

僕達は男子寮の仲間五人と一緒に二泊三日の短い旅に来ていた

来年の夏休みは受験一色に染まってしまう

ほんの短い楽しみに浸っていた

「馬鹿らしい。女の子なんて良いよ。彼女なんていらないし
ぶっきらばうに吐き捨てた

「本当に可愛い子なんだって！なあ 行こうぜ？」

何時になく食いついてくる

何なんだあ？

「しつこいぞ！」

翔は肩をすぼめて「判ったよ！後で後悔しても知らないからな？」
珍しく翔が拗ねている

「ハイハイ！因みに後悔は後ですから後悔って言うんだよ？」

翔の言葉尻を捉えて屁理屈を唱えた僕に 翔はムツとした顔をした

「可愛くないやつ！ああ ムカつく！」

「そこ なに痴話喧嘩してるんだよ？ほら この女の子イケてるぞ
！」
晃がエロ雑誌に載っているグラビアを見せながら翔と海の間に入ってきた

「「趣味悪！」」

二人して晃のお気に入りのグラビアアイドルを貶して翔の気も済んだみたいだ

それから 翔は女の子を紹介しようなどと言わなくなった

楽園（前書き）

海夜は一体 だれなんだろう？

楽園

夜の闇に浮かぶ城

『Eden』

楽園と言う名を持つ不夜城に今 俺は生きている

死んだような目をして それでも生に固執しながら生き長らえている

何故 あの時死んでしまわなかったのか？

何故 一緒に逝かなかったのか？

「海夜^{カイヤ} 指名だよ？」

メンソールの煙草を曇らせている小さな部屋に マネージャーの謙
吾さんが声を掛けた

「了解」

数人の男の中から 夜の闇のような真っ黒な髪を一つに束ねた細身
の男性が 気だるそうに立ち上がった

源氏名を海夜^{カイヤ}

この店のナンバー3

他の男からは ため息が漏れる

「何で 彼奴はトップを狙わないんだ？本気になれば神^{シン}や龍都に引
けを取らないんじゃないかあ？」

神はこの店のNo.1
龍都がNo.2だ

誰につくでもない下っ端のホストが呟く

確かに そいつの言った通りだ

海夜を鼻屑にしている女性は神や龍都のそれよりも 羽振りが良く
金払いも良い。殆どが 堅気の女性だ。

しかし、海夜が彼女達から金をせびるのを嫌がった。

元々 水商売とは縁のない奴なんだろう。いつだったか、海夜と、
彼奴を一番鼻屑にしている女性社長が話している内容など、ホスト
クラブで話すものでは無かった。

世界経済や株式、まるでどこかの会社の会議室にいるような錯覚に
陥った

そのため、ヘルプに付く他のホストが居ないのだ

だからなのか、海夜はいつも女性と二人だけで店のコーナーに座る

周りはギャアギャアと五月蠅く騒いでも その一角だけは落ち着いたバーのようだった

「いらつしやいませ。水沢様。」

僅かばかりの笑みを浮かべて 海夜がその女性の手の甲に唇を寄せた

たおやかな笑みを浮かべて満足そうな表情を見せる女性は、海夜の
一の客である大手エステサロンの社長、水沢美香だ。

三十台に見えるが、既に五十を超えているはずだ

海夜と水沢はいつものように二人だけで真剣な顔をして話している。

時折 はにかむように微笑んでいるのだから、水沢社長も満更ではないのだろう

小一時間たった後、水沢社長は海夜の頬にキスをして颯爽と帰って行った

たった二杯の酒と一皿のフルーツだけで彼女は百万を払った

「水沢様。これでは多すぎます。」

マネージャーが申し訳なさそうに伝えると

水沢はふっと微笑んで彼に秘密を打ち明けるように言った

「残りを海夜のお給料に追加しておいてくれる？あの子に何かお礼をしたいのだけど受け取ってくれないの。お給料を頂いているからいいと言ってね。だからお給料なら受け取ってくれるでしょ？本当に欲がないんだから」

その人は、悪戯を思いついた子供のように楽しそうに笑った

いつも社交辞令的な笑顔しか知らないマネージャーや若いホスト達は、彼女の初めて見せたであろう本当の微笑みに心を奪われた

「海夜のことが本当にお気に入りなんですネ？」

マネージャーの一言に水沢社長は思いがけない事を口にした

「ええ。引き抜きたいと何度もアプローチしたけど駄目だったわ。

ごめんなさいね？こんな事バラしちゃって。

でも、あの子はどんな良い条件を出しても受けてくれなかったし、多分これからもそうだと思うわ。

この仕事が好きでもなさそうだし、何か理由が有るんでしょうね？

あの子が理由も無しに動くななんて有り得ないから。

あら。喋り過ぎちゃったみたい。海夜には内緒ね！

じゃあ 有難う。楽しかったわ。」

颯爽とお迎えのジャガーに乗って水沢社長は帰って行った

海夜のお客様には ああいう人が多い

海夜と話す為だけにこの店に来ている女性達だ

酒を飲む為でも、騒ぐ為でも、憂さを晴らす為でも無く、只海夜と話す為だけに足とお金を運んでいる人達だ

海夜はホストには珍しく、客からのプレゼントを一切 受け取らない

勿論、アフターもしない。彼奴にとってこの場所は只の仕事場に過ぎないからだ

夜の世界が好きでいる奴がほとんどの世界で 彼奴はやはり異質だった

オーナーの雪さんが海夜を連れてきたのは 二年前の冬だった

海夜と言う名はオーナーが付けた

確かに海夜には夜の闇がよく似合った

店でも一番の美形で190近い長身のくせに下働きも黙々とこなす。
無口で、休憩室ではいつも本を読んでいた。

そう、ホストの世界には似合わない人種

しかし、海夜が店に出ると直ぐに指名が入った

いつも何かしらいちやもんを付けて当たり散らす社長令嬢だ。先輩
ホストの策略だった。

彼女が海夜と話すにつれ、彼女の声が徐々に低くなってきた。最後には海夜の胸に顔をうずめて泣き出したのだ。固唾を飲んで二人を見ていた他のホスト達は、呆氣に取られ何が起こったのか理解するのに時間がかかった。

まるで魔法を使っただのように 彼女の顔は店に来たときとは別の顔になっていた。

勿論 彼女は今でも海夜の良いお客様だ。

しかし、以前のように敵のようにお金を使うことなどせず、時折来て海夜と二人きりで二時間程 お喋りして 楽しそうに帰ってゆく。

その人も来月に結婚してアメリカに行くという。

「先に上がります。お疲れ様でした」

夜の闇は ネオンに掻き消され薄くベールを被っていた

11時

今夜は早い

ホストクラブではこれからがかきいれどきだろう。

しかし、俺は明日のため今夜は早めに店を出た。

三月八日

アイツの命日だ

偶然（前書き）

海夜が助けた少女はいつたい誰？

偶然

「止めて下さい！放して！ 止めて！ 誰か 助けて！」

煌びやかな人工の派手な光の中を歩くのは久しぶりだ

いつもは東の空が薄明かりに変わる頃にしか、この街を歩かない。

「誰か 助けて！」

何だ？誰も助けないのか？

みんな無視かよ！

「止める！」

制服姿の女子高生の腕を掴んでいたチャラ男の腕を捻り上げた。

「イツテエなあ！何すんだよ？」

くすんだ顔色をした若いんだか老けてるのか判らない男が大袈裟に喚く

「嫌がつてるだろう？放してやれよ？」

捻り上げている手にグツと力を入れた。

「いついつてえゝ 判ったよ。判ったから放せよ！」

その男は、泣きそうな声を上げて、それでも俺が手を放すと「覚えてろよ」捨て台詞を吐き捨て走っていった。

「有難うございました。」今時 珍しいお下げ髪の女子高生だ。確かこの制服は、お嬢様学校で有名な聖マリアンナ女学院だ。

「あんたもそんな格好で、こんな時間にこんな所にいるからいけないんだ。誘ってくれって言うてるようなもんだろ」

海夜にしては珍しく嫌みを口に使っていた

その言葉にカチンと来たのか、それまでしおらしく俯いていた女子高生は、思いつきり不機嫌そうに口を開いた

「仕方ないでしょう。私だって好き好んでこんな所にいるわけじゃないわ。この筋の向こうに予備校があるんだから仕方がないじゃない。駅への道が通行止めだったから、仕方なくここを通っただけよ！私のせいじゃ無いわ！」

大人しい少女だと思っていたが、見立て違いみたいだ。

「ああ、そうですか？すみませんね？それでは、早くお帰り下さい。お嬢様」

ム力つく気持ちを抑えられず、嫌みったらしい言葉を吐いて歩き出した。

「ちょっと待ちなさいよ？私 一人だと危ないでしょ？送って行かなければと思わないの？」

「はっ？ お前 誰に物言ってんだ？ああ？」

「今 あなたが危ないから助けたんでしょ？だったら最後まで面倒見なさいよ？そんな事 常識よ！」

高飛車な態度に海夜の苛立ちは募る一方だ。

「お前な、送って欲しいんなら送って下さいってお願いしろよ？」

「はあ 怖いんだな？」

女子高生の思惑など知った事ではない

「こっ怖くなんてないわよ！ 別に！

只 あなたが送るのが筋だって言ってるだけよ！」

どこまでも 傲慢な態度を貫くつもりらしい。

何だかこんな餓鬼にム力ついているのも馬鹿らしくなっていた。

「ハイハイ。判りましたよ。送れば良いんでしょう？送れば。
では お嬢様。まいりましょうか？」

海夜は五メートル程離れていたその少女に向かい手を差し出した。

少女の顔が 赤く見えたのはネオンのせいだろうか…

最寄の駅まで送り届けるだけのつもりだった

黙々と足を進める二人の距離はきつかりメートルは有っただろう。

今時の女子高生のように
携帯を触る訳でもなく
しっかりと前を
見据えて歩いていた

「あつ……」

たどり着いた駅は、既に真つ暗で非常灯だけが主張をしていた。

「...うん、うん。」

途方に暮れているその子の腕を掴み、タクシーを停めた。

「ついでだから送っていつてやるよ。家は何処だ？」

「成城」

「ふーん。やっぱりお嬢だな。」

最後まで送り届けないと後で何を言われるか判ったもんじゃないかな。

お前の言う筋を通してやるよ。」

停まったタクシーの後部座席の奥に少女を押し込め、続いて海夜も乗り込んだ。

静寂が車中に広がる。

エンジの縁取りが施された紺色のボレロ風ジャケットに紺色のジャンパースカート

ここ何年かは、女子中学生の憧れる制服のNo.1だ。

興味は無いが、一度知識として入った情報は容易く忘れない特技を

持つ、海夜の脳裏に浮かんでいた。

車は世田谷の高級住宅街に入っていく。

「どの辺りですか？」と、運転手が後ろに声を掛けてきた。

窓の外を見つめていた女子が、驚いたように

「二つ目の角を左に曲がって三軒目です。」と応えた。

音もなくスーツとタクシーが停まり後ろのドアを開けた。

「あの 送ってもらって有難う。」

消えてしまいそうな声で 礼を言った少女は クルリと回りすぐ前の黒い門扉の中に消えていった。

邂逅（前書き）

新しい人物が登場してきました。

流夏と海夜の繋がりは…

邂逅

「お客さん 何処まで？」

不意に運転手が声を掛けてきた

「あつごめん。渋谷まで戻ってくれる？」

「喧嘩でもしたんですか？お二人共ずっと喋らなかったし……」

今まで気を使ってくれていたんだろうな。

無口な運転手だなと思っていたんだ

―三月八日―

あいつは自らの命を絶った

同じ大学の同じ学部を受けた二人の内 一人は合格し、もう一人は不合格だった

ずっと一緒に切磋琢磨しながら道を極めたかった

それなのに…

俺が殺した

あいつのプライドを、心を傷付けた

誇り高く、美しい心を傷付けてしまった

今年も あいつの好きだった百合の花を持って あいつが眠る高台の墓地にやって来た

「翔 そっちはもう桜が咲いてるか？ コッチはまだまだ寒くて今年の桜は遅れるみたいだ。」

翔がいつも食べていたをプリッツを墓石の前に置き、海夜は歩き始めた

墓地の入口で海夜は、黒いスーツを着た男性とすれ違った。誰かを待っているみたいに白い菊の花と水桶を持っていた。そういえば、去年も見かけた気がする。

駐車場の一番奥に停めてあった自分の車のドアを開けたとき、海夜は思いがけない名を聞いた。

「るっ。遅いぞ。また遅刻だ。昨日 遅くまで出歩いているからだぞ。」

…るっ…

何処かで聞いた名前

あの名前は…

海夜はふとドアを開ける手を止め、声のした方を見た

五年前の出来事が走馬灯のように頭に蘇る

最初で最後の楽しくて幸せだった夏

まただ。

今年も 誰かが先に来たみたいだ。

毎年 兄の命日には
家族以外の誰かが朝早くにお参りに来ている。

今年こそはと 朝早くに来るつもりだったのに また遅刻してしま
った。これでは、何のためにタベ家に帰ったのか判らない。

流夏は聖マリアンナ学院の寮に入っている。家からでも通える距離
だが、あの広い家の中で、あの人と一緒にいることに耐えられなか
ったのだ。

あの人……

父の新しい奥さん

今までの女性^{ひと}みたいに、数ヶ月いるだけなら我慢出来た。

愛想笑いをして、他愛のない世間話をしていれば良かっただけなんだから。

でも、今度の女性^{ひと}は最初から違っていた。

私に媚びるわけでもなく、愛想笑いをするわけでもなく、我が儘に高飛車に振る舞っていた。

そつ……まるで…私のように…

大嫌いな女

美香

あの人を見ていると自分を見ているようで、気持ちが悪くなる。

父にしては珍しく、美香とは私の承諾無しに籍を入れてしまった。

これまでの女性は、数ヶ月私と暮らしただけで逃げ出したから、父の妻だった訳では無い。

父にとって妻と呼べる女性^{ひと}は、私を産んで直ぐ亡くなった母 由希子と、今の奥さん 美香だけだ。

「パパ。今日は美香さん来なかったのね？」

お兄ちゃんの命日にも顔を出さないなんて、あの女は何を考えているのか。

「ああ。昨日急に仕事でトラブルが入ったと言っていたから、朝早くに出掛けたみたいだな。多分、山梨の工場じゃないかな。」

美香は会社を経営しているバリバリのキャリアウーマンで仕事を生きがい^{ひと}にしているような女性だ。

いつも一流品を身に付け、隙を見せない完璧な女性。

だったら、パパみたいな中年男と結婚しなくても良いんじゃないかと思ったものだ。

初めて紹介された時は三十代だと思っていたが、本当はパパより一

つ年上なんだそうだ。

化け物なんじゃないの？

でも 一体誰なんだろう？ お兄ちゃんの命日に来るって事は、お兄ちゃんの関係者なんだろうか。

恋人？友達？

ずっと離れて暮らしていた兄の交友関係など、父親にも妹の私にも知る術などなかった。

後悔（前書き）

海夜の過去が明らかになる。

後悔

海夜が部屋に帰ってくると、大学から来年度の手続き書類が届いていた。

そうか。

もう三年になるのか。お袋もそろそろ諦めて欲しいものだ。

大学に合格したまま一度も行っていない息子のために、お袋は学費を払い続けていた。

キット八年間払い続けるつもりなんだろう。

三年前の三月八日 国立大学前期試験の合格発表の日

Ｔ大 理三の合格者の欄に 俺の番号があった

お袋は、俺が丁大に合格したことが余程嬉しかったのか、電話口で涙を流していた。

俺自身も一つの目標が達成出来たことが嬉しくて、回りの現実を見ることが出来なかった。

そう・・・あの時、もう少し冷静に物事を判断できていたら・・・俺は今も幸せな時間を過ごしていただろうか。

「翔！ 翔！ やったぞ！ 受かった！！」

「・・・・・・・・・・そうか・・・・・・・・・・おめでとう・・・・・・・・」

「何だよ？ もつと喜んでくれよ？ これからもお前と一緒に大学にいけるんだぞ？ すっげー嬉しい！」

俺は 何も判っちゃいなかった・・・

何も 見えていなかった・・・

プツリと切れたその携帯は もう二度と繋がることは無かった

・・・その翌日 翔は高校の屋上から身を投げたのだ

翔は俺と同じT大の理三を受験していた。この国の最高大学で医学を学ぶことが、俺たち二人の最初の目標だった。

これまで、翔の方がずっと成績は良かったし、全国模試でも常にAランクを貰っていた。

だから、翔が不合格になることなど万が一にも有り得ないと思っていたし、俺の頭の中にはそんな考えは生まれもしなかったんだ。

何故、あの時、翔の声をきかなかったのか・・・

何故、あの時、もう少しでも冷静になれなかったのか・・・

何故・・・何故・・・何故・・・

そうすれば、翔は死なくて良かったんだ……

俺が 翔を 死に追いやってしまった……

俺が 翔の背中を押してしまった……

・・・その後悔だけで、今まで生き長らえてきた

ただ、息をするだけの無意味な時間

翔と一緒にいた三年間と　翔がいなくなった三年間

地球では同じ時間が流れているのに、俺にとってその二つは余りにも違いすぎた

「もしもし　母さん。俺。元気にしてる？」

うん。俺も元気だよ？今日　大学の書類が届いたんだけど、もう
良いから…

もう 無理しなくても良いから…

俺はもう戻れない」

絞り出すように伝えた言葉は、お袋に伝わっただろうか？

もう止した方が良い

戻る事の無い大学に学費を払い続けるなど 愚の骨頂だ。

その金で、少し贅沢すれば良いんだ

結局、お袋との会話は平行線のままで、今年も俺は大学に居座り続けるみたいだ。

昼過ぎ、煙草を買いに近くのコンビニに足を運んだ。

この時間帯に来るのは初めてだ。

ついでに昼飯の弁当でも買うつもりだった。

「鳴瀬 じゃないか？海だろ？ 俺だよ！古澤晃！覚えてるだろ？
晃だよ」

ブルーのストライプの制服を着た店員が、ニコニコしながら声を掛けてきた

古澤晃

俺達の友達

「久しぶりだな？」目を逸らして 返事をした。

まともに顔を見ると、泣き出してしまいそうだったからだ。懐かしさと嬉しさと後ろめたさに心が壊れてしまいそうだった。

「近くに住んでいるのか？俺はこの上のマンションなんだ。あと少しで置けるから寄って行かないか？」

ううん。寄って行ってくれ。絶対にな」

晃の瞳が真剣な光を讃えている。

断ることを見越しているのか、頑として引き下がらないオーラがあった。

「判った。前の本屋にいるから終わったら声を掛けてくれ」

泣き出しそうな表情に変わった晃の顔を見つめて　そう言わずにはおられなかった。

あの日

翔が亡くなった事を教えてくれたのは、晃だった。

寮の部屋で退寮の為の荷造りをしている所に、晃が泣きながら飛び込んで来た。

「かけるが・かけるが死んだ！」

突拍子もない話に 俺は冗談だろうと笑い飛ばした。

「悪い冗談だぞ！翔が怒ってくるぞ！」

「ほっ・・本当だって！ 翔が屋上から飛び降りたんだ！」
泣きながら俺にすがりついた晃の身体は震えていた。

「嘘だ！ そんな事 信じてない！嘘だ！これからも同じ 大学
に行くんだ！」

俺は必死で晃の話を打ち消そうとしていた。

「お前、知らなかったのか？翔は 落ちたんだ。合格確実と言われていたのに、あいつは不合格だったんだよ！ だから…あいつは…」

バカだよ！来年 受験すれば良いのに…なんで…なんで…
晃の声は最後まで聞こえない

・
・俺のせいだ・
・

・
・俺の言葉が翔を絶望に突き落としたんだ・
・

身体中から血液が抜けていくみたいに 俺は意識を失った

友人

本屋で何気なしに取った本は 数学の専門誌だった。

翔は 英語が得意で俺は 数学が得意だった。

久々に目にした数式に 俺はいつの間にか没頭していた。

「・・・かい・・・オイ!・・・ 海!」

ふと声のするほうを見ると、いつの間にか 晃が隣に座り込んでいた。

「あつ終わったのか？」

開いていた数学書を元に戻し、動揺を気取られないように頭を掻いた。

「かれこれ三十分待ってるんだけど。」

「えっ　！？」

「相変わらずだな。お前は。」

かけるも、没頭し始めたら周りが見えなくなって困ったもんだっただけからな。」

カラカラカラと高校時代と同じように笑った晃が「行こうぜ」と海を部屋に連れて行った。

コンビニの上の階は学生マンションらしく、全ての部屋がワンルームらしい。

無機質などシルバーのドアを開けると、部屋には無造作に洋服やら漫画雑誌が放つたらかしになっている。晃は昔から整理整頓が苦手だったんだ。

「へへへ悪いな？汚くて。判ってたら掃除しておいたんだけどさ。」
「言い訳がましく話す晃に、ブツと吹き出してしまった。」

「変わってないな？相変わらずです何だか嬉しい」

それは本当の思い。

変わらずにいる人間が居てるだけで、何だか涙が出そうなほど嬉し

い。

「ビールにするか？それとも珈琲か？」

海の珈琲好きを覚えているのか

「ああ、珈琲が良い」

そう言っていると、晃は棚から珈琲豆をミルに入れガリガリと掻き、珈琲メーカーにセットした。

そうだった。コイツも無類の珈琲好きだったんだ。

「相変わらずだな」

同じ言葉を繰り返す

「俺 酒が苦手だからさ、珈琲だけは妥協したくないんだ

海は酒もザルだから良いけどさ！」

暫くすると、珈琲の良い香りが立ちこめ晃が白いマグカップに並々と注いだ。

晃がベットに 俺が一つしかない椅子に腰掛け熱々の珈琲を手にした。

「そう言えば、あの夏の旅行だよ。あの時、お前がずぶ濡れになって帰ってきた時だよ。孝之が濡れちゃってさ、声を掛けた女の子達は怒って帰っちゃうし、お前は帰ってこないし、翔は狸寝入りしてるし、最悪だったよ。お前と翔の顔が必要だったのにさ。」

でも、あの夏は楽しかったよなあ？ 俺達、中学から一緒だったけど、あんな風に海に遊びに行くなんて無かったからなあ。勉強ばかりでさ。特に翔なんて、大病院の跡取だろ？親からのプレッシャーは並大抵のもんじゃないかなったはずだし。だから誘った時、翔が乗るなんて思わなかったんだぜ？」

そうだ。あの旅行は、本当に楽しかった。

俺にとっても、初めての旅行。

一年の夏休みは、学校に隠れてバイトをしていた。少しでも、母親の負担をやわらげたかったからだ。

高校の学費は、特待生だった為免除されていた。しかし、寮費などの生活費は母親に頼らなければいけない。父親を幼い頃に亡くした俺にとって、たった一人の肉親である母の存在は何者にも変えがたい存在だった。だから、少しでも母を助けたかったし、母に楽をさせたかった。

医者になることを決めたのだから、半分は金儲けの為。翔のように、人の命を助けたいというような崇高な精神ではなかったんだ。

「海。大学行ってるんだよね？」

他の学部の人に聞いても、見かけた事が無いって言うし、連絡出来ないし、みんな心配してたんだぞ」

晃は早稲田の教育学部に入った。

仲の良かったメンバーの殆どが、都内の大学に通っている筈だ

「一度も行つてない。辞めるつもりだ。」

「何だよ！まだ辞めてないんだろ？だったら行けば良いじゃないか？」

「お袋が諦めてないだけなんだよ。俺はとうに行くつもりはないんだから。」

「何だよ？何で お前まで・・・」

翔の分までお前が頑張らないといけないんじゃないか？

翔の夢を叶えるのはお前しか出来ないんだから・・・」

晃が怖いほどの剣幕で訴えてくる。

でも・・・もう・・・

それに、晃だつて俺がしたことを知ったら、きっと・・・

此処まで来て・・・まだ友達に良い顔をしたいのか・・・

・・・最悪だな・・・

「もう 無理だ！」

「まだ、翔の自殺を自分のせいだと思ってるのか？ お前は何にも悪くないんだ。誰のせいでも無く翔は自分に負けただけなんだ。頼むから、翔の死から立ち直ってくれよ？」

「俺のせいなんだよ。俺があの時・・・あんな事・・・」

サッと晃の顔が変わった

「俺は・・・俺は・・・あの時・・・かけるに・・・」

俺は頭を抱えてうずくまってしまった。

「何かあったのか？あの日、二人の間に何かあったのか？」

その沈黙は、俺が費やしてきた三年間に匹敵する長さのようだ

「お前が合格したのは悪いことじゃないんだぞ。」

晃の手が、海の頭に触れ、ポンポンと慈しむように叩いた。

「近くなんだから、ちよくちよく逢おうぜ。な？」

海。 大学行けよ？ もう、お前の人生を歩けよ？ なっ？」

帰り際に晃の言った言葉

俺の人生

そんなもの 有るんだろうか？

生きるわけでもなく、死ぬことも出来ずにもがいている

晃のマンションを出ると、眩しいくらいの日差しが降り注いでいた。

昼間の明るさは俺には辛い。

深海のような闇の中に生きている俺は、深海魚のように海の底で漂っているだけ・・・

昔、匠が妹へのプレゼントだと言って持っていた「人魚姫」の人魚のように明るい外の世界に夢をもてるのだろうか？

裂傷（前書き）

流夏と 翔は兄妹なのか？

海夜の悩みは尽きない

裂傷

流夏はいつものように、制服に着替え階段を下りた。

「あら、おはよう。流夏さん。今から学校？私ももう直ぐ出るから、一緒に乗って行きましようよ。ね？」

一寸の狂いもないメイクに彩られた顔

おぞましい！

醜い筈はない。この女性^{ひと}は濃いメイクをしている訳ではない。適度にトレンドを取り入れ、それでいて上品さを失わない。

女性誌に取り上げられる事も 判ると言うものだ。

五十の大病台に乗っても、若さと美しさを保ち、大病院の院長夫人の座を射止め、自らも会社社長を務めるセレブな女性。

他の女性からの嫉妬と妬みより、憧れを抱かせる稀有な存在

それが、パパの奥さんである美香だ。

見ているだけで、ムカつく！

「いいえ。バスで行きますので結構です」

にこやかに飛びきりの笑みを浮かべ鞆を手に持った。

「あら、そう？でもバスで行くと遅刻しちゃうわよ？もう八時前だもの。」

あちゃー 寮でいるときと同じように支度をしていた。

今の時間帯は、バスが混むんだった。

はあー

仕方ないか？背に腹は代えられない。

「それでは、お願い出来ますか？」ニコツと笑って首を傾げる。男の子にはこれが効くが、この人には到底 無理でしょうね・

美香さんの車に乗って女学院までの道すがら、彼女は昨日のことを謝ってくれた。

「ごめんなさいね？お兄様のご命日だったのに・・・」

「いいえ。来年もあるんだからいいんじゃないですか？それより、トラブルって聞きましたけど、大丈夫だったんですか？」

朝早くから出かけた美香は、私が起きている時間にはまだ帰っていませんでした。

「ええ。漸くね。製品の使用方法を誤って使っていたお客様が、泣きついてきたのよ。担当者がもつときめ細かいサービスを提供しないと、直ぐ駄目になってしまうのね。この業界は・・・」

「大変ですね？」

「ええ。でも、クレームでも言ってきたくれる人のほうがまだまし。こちらに言ってこない人は、二度とうちの製品を手にとらないし、店にも来ない。そればかりか、口コミで嫌な噂が流れるから怖いんだよ。女って・・・」

完璧なまでの美しい横顔が、少し歪んだ。

そうだよな。今まで、女独りで生きてきたんだから、色んな波を乗り越えてきてるんだろうな・・・

母としても、パパの奥さんとしても認めないけど、一人の女性としては認めざるを得ない。

校門の前で車から降り、足早に校舎までの坂を走った。

・・・痛・・・

最近、走ると左脛が痛む。

・・運動不足かな?・・・

あの日から一週間が過ぎた。

相変わらず海夜は、夜の海に浸っている。

夜 七時過ぎに店に入り、明け方出て行く。そんな毎日を送ってい

た。

その日も 同じように黒いスーツを着て、俺は「海」から「海夜」に身づくろいをした。

灯の点っていないネオンもある時間帯

・・・？・・・誰だ？・・・

流石に酔っ払いはまだ居ないが、制服姿で此処に居たら危ないだろう。

「お前は・・・」

あのときの少女だった。

「あつ」

誰かを待っているかのように、きよろきよろしていた彼女はおれの姿を見つけると、重そうな鞆を手にとってきた。

「良かった！！逢えなかったらどうしようかと思ってたの。ハイ。この間のお礼。」

余り美味しくないかも知れないけど、食べてね。」

彼女は鞆から綺麗にラッピングした浅黄色の箱を差し出した。

「えっ？ 何？」

突然のことに戸惑う俺の手に、無理やりそれを持たせ「じゃあ」と走りだした。

「毒なんて入ってないからね！」

振り向きざまに言った言葉に「ぶっ！！」と噴出してしまった俺は、笑い出していた。

ガッちゃん・・・その子が、歩道に出ている看板に躓いてこけてしまった。

「あつ」

思わず駆け寄った俺の目に飛び込んできたのは、割れた看板の欠片にザツクリと裂かれた彼女の太股だった。

ドクドクと血が噴出し、彼女は真っ青になって震え出した。

俺は、思わず自分のネクタイを解き彼女の止血をしていた。

救急車の中で震える彼女は
「パパの病院へ」と彼女に付き添う俺に、救急隊員が氏名を尋ねてきた。

そう言えば、名前も知らないんだ

「あつちょっと待って下さい。」

君　名前は？保険証とか持ってる？」

苦痛に顔を歪めている彼女に声を掛けた。

応急処置をしてもらっている彼女が、生徒手帳をだした。

「小野寺流夏。保険証は財布の中に入ってます。」彼女は『小野寺病院』の娘らしい。

小野寺病院

院長の小野寺尚哉^{おののしやうや}博士は心臓外科の権威だ。ただ、独裁的で傲慢な経営に意を唱えるものも多いと聞いた。

翔も小野寺だった。

まさか・・・

兄妹か・・・？

まさかな？

救急車は小野寺病院では無く、近くの救急病院に入っていた。

「今夜の救急担当はこの病院なので、申し訳ないですが、それで良いですね？」

救急隊員がストレッチャーに乗った流夏に話していた。

何だか彼女の顔色がまた悪くなったように思うのは思い過ごしか？

処置室で傷の手当てをしてもらう間、俺は店に電話を入れた

「もしもし海夜です。すみませんが今日 休ませて貰えますか？

．．．．．

はい。ちょっと知り合いが怪我をしてしまったので今病院なんです。

．．．．．

はい。そうです。

．．．．．

すみません」

救急車に乗り込む所をマネージャーが見ていたらしい。

女絡みのトラブルかと心配していたが、海夜に限って有り得ないなと笑っていた。

イソジンの匂いが処置室に漂っている。痛々しいぐらいの包帯が、彼女の白い肌を覆っていた。

「送っていくよ。成城に行けば良いな？」

すると、彼女はぐつと頭をもたげて

「今日はあの家は駄目！ 寮へ帰るわ」と、高飛車

言い放った。

「どうしてだよ？これからの傷の処置についても、親に話しておかないといけないだろ？」

乗り掛かった船だ。面倒だけど、説明しなかったら心配するだろ？

それに・・・」

長い睫に縁取られた切れ長の目が 一瞬曇った

「今日は駄目！ あの人がいるから。」

（あの人と二人きりなんて耐えられない。）

あくまで家には帰らないつもりらしい。

しかし、寮って門限があるんじゃないか？

「おい。お前。」

「流夏よ。あなたにお前って言われる筋合いはないわ！」

気のキツイ女だ

「流夏さん？寮って門限があるんじゃないか？」

流夏はハッと顔を上げて 処置室の時計を見た。

九時二十分

「ウッソー!!..どうしよう・・初めて門限破っちゃった。
どうしよう?」

あんなデカイ家があるんだから、帰れば良いものを、どうして帰りたくないのか?

まあ、別に判りたくはないが。

しかし、これからコイツをどうするかだ

「お前、家に帰らないのなら何処か泊まる所はあるのか?」

俺の質問に 彼女はグツと黙ってしまった。

「友達とか居ないのか?」

「・・・」

友達も居ないのかよ？

「アンタんちに泊めてよ？ソファーで良いから。」

衝撃（前書き）

流夏と海

二人の關係に暗い雲が近付いていた。

衝撃

成瀬 海

ホストの癖に頭が良くて、ム力つく程 綺麗だ。

私を誰だと思ってるのよ。

小野寺病院の一人娘よ。

顔を見たら意地悪しか言わないし 皮肉な事ばかり言っし 全然可愛くない！

ほんとにム力つくわ！

流夏は 今 男の部屋にいる。

どうしても 帰らないと駄々をこねたのだ。

悪態をつき、我が儘を言いその男を困らせた。

その結果がこれである。

私の太ももには包帯が巻かれている

その怪我は、別に彼のせいでも無いのに病院まで付き添い、治療費まで払ってくれた。

お人好しと言うか、お節介と言うか、まあ優しいには違いはないみたいだ。やっぱりホストをやっている男だから、女に優しくするところが身についているのかも知れない。

女学院の寮には、彼の知り合いの女性が家に帰っているから心配いらないと連絡してくれた。

まさか、客？

でも、立場的に私は何も言えない。その女が彼の客で有ろうが無かろうが大した事じゃないから。

「お前。夕飯は済んでるのか？」

成瀬海はベッドサイドから、私に声を掛けてきた。

もう、今夜は仕事に行かないらしい。

黒いスーツからラフなスウェットに着替えた彼は、髪も無造作に崩した為、さっきより二・三歳は若く見えた。

返事をする前に、お腹がぐうぐうと鳴ってしまった。

ヤバイ！

「クッククク。もう着替えたから外に出るのも何だし、作るわ。」

好き嫌いは無いよな！」

有無を言わさない問い掛け？にムツとしたが、空腹には勝てなかった。

キョロキョロと部屋を見渡すと、全てがワンルームになっている。

と言っても、むちゃくちゃ広い。

オープンキッチンには大型の冷蔵庫。

私が充分寝れる大きなソファーと一人用のリクライニングらしき椅子

その前には五十インチ位かな、液晶テレビとオーディオ

そして、一番奥にはダブルベッドがあった。

それら全てが黒で統一されていて、どうしても無機質な寒々しい部屋になっていた。

やっぱりホストって儲かるんだね。

お兄ちゃんと同じ位の筈なのに、こんな良い部屋に住んでいるんだもの。

「何 キヨロキヨロしてるんだよ。変な物は無いぞ。

ほら！食べ」

海が出して来たのは、パツパツと作ったには不思議な位の本格的なカレーライスだった。

「レトルト？」

「失礼な事を言うな！昨日一日かけて煮込んだ本格カレーだぞ。まあ、お子ちゃまには辛すぎるかも知れないけどそれぐらいは我慢しろ。」

角切りになったビーフは溶け、辛いだけじゃないコクがあった。

これは本格的だ。

サラダはレタスとキュウリとトマトのシンプルなものだったが、此処でこんな美味しいものが食べれるなんて思いもよらなかった。

「美味しい！アナタ凄い特技が有るんだね？」

「ふん！それ食ったら早く寝ろよ。今は痛み止めが効いているから良いけど、もう少ししたら痛くて寝れなくなるぞ！」

これに着替えてベッドで寝ろ。」

海はクローゼットから洗いたてのスウェットを出して流夏に渡した。

海はベッドを開け渡してくれた

「私、ソファで良いよ。泊めてくれるだけでも 有り難いんだから。」

流夏にしてはいつになく素直に礼を言っ たつもりだった。

「はっ！お嬢様をソファーなんかで寝させたら後で何を言われるか判らないからな？」

それに、俺はまだ眠く無いんだよ。お前が此処で寝てたら俺はテレビも見れないだろ？」

ホントに素直じゃないんだから。

「明日は小野寺病院まで送っていくからな？」

整形外科で見てもらえよ？」

整形外科？

「どうして整形なの？怪我なら外科で良いんじゃないの？」

「いや・・・X線撮ってもらえ！」

レントゲンなんて必要ないよ。

いくら何でも骨までいつてないもん。

そんな事を考えていた流夏だったが、どうしてか瞼が重くなっていた。

先程、海は流夏の紅茶に微量の睡眠導入剤を入れていた。

もう少ししたら麻酔が切れる筈だ。そうなると多分彼女は痛みで一晩中苦しむだろう。それを少しでも和らげてやりたかったのだ。

翌朝、やはり痛みが出てきたらしい流夏はグツと唇を噛んで我慢している。只の我が儘なお嬢さんだけではないみたいだ。

海は自分の車を出し流夏を小野寺病院まで連れて行った。

「パパはいる？」

高飛車な態度で流夏は受付の女性に聞いていた。

待合いロビーにいる女性達の視線は、流夏の後ろにいる海に釘付けになっている。

夜の闇の中以外でも、海の美しさは際立っていた。

「院長はまだお見えになっておられません。お嬢様、お怪我をされているんですか？」

奥の部屋から事務長と呼ばれた男性が出てきて流夏に説明してきた。

「外科の当直に連絡を取りました。処置室まで来ていただけますか？」事務長は彼女を怒らせまいと言葉を選んで居るみたいだ。

そうか。まだ診察時間には早いんだな。

「整形外科の先生はいらっしゃいますか？一度脚を観てやって欲しいんです。」

流夏の後から海が口を挟んだ。

「あつ整形外科の先生はもう来てますから、呼びますね。」

ビクビクしていた事務長は海の言葉に安心したようにすぐさま受話器を取った。

「骨折なんてしてないわよ。」流夏が馬鹿にしたように言い放つ。

しかし、何故か海は頑として引き下らない。

二人の間でオロオロしている小太りの事務長が整形外科の医師を呼び出した。

格闘家かと思うような体型をした整形外科の医師が、体型に似合わない程軽やかに廊下を走ってきた。

「茅原です。急患つてのは流夏さんでしたか。お怪我されたんですか？」人懐っこい笑みを浮かべたその医師が問い掛けてきた。

先ずは傷の消毒をしてもらい新しい包帯を巻いている。

「この程度なら、わざわざうちに来なくても、家で消毒出来ますよ？」

にこやかな笑みを浮かべた整形外科の医師が流夏に伝えていた。

「レントゲンを撮って下さい。出来れば血液検査も。」

二人の話に横槍を入れたのは、海。

「どうして？」

骨に異常はないのに？」

「お願いします。もしかしたら・・・」

海の頼みに疑心暗鬼になりながらも、流夏はレントゲン室に入っていた。

「君は何か気になるのかい？」

「流夏の転け方が気になって。膝に故障が有るんじゃないかと・・・」

海が気になっていたのは、流夏が看板に当たる直前の膝の曲がり方だった。

靱帯を傷付けて居るのか・・・それとも・・・骨か・・・

海の不安が、現実となるのは直ぐのことだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9932e/>

人魚姫

2010年10月8日23時10分発行